

涼

しさを求めて

夏の生活を重視した
——日本の家

信号が青になっても動かない程、都市は車で溢れている。人は車の間をすり抜ける。人は車間をすり抜ける。道は車に占領され、夏ともなるとエアコンによってドライバ―は涼に浸れる反面、歩行者はあんなとも言えぬ外気に包まれ、涼やかなドライバ―とは正反対に顔が金でいくのである。便利なものが人を豊かにするとは限らず、個人の豊かさが社会に対して何かを強いているかのようになっている時に、江戸末期に建てられた民家の改造に関することが出来、喜ばしい限りであった。

建築とは、その国の気候風土の中で人々が生命及び財産を守るために、最初は単純な囲いを作り、道具の進歩と共に、長年、長い年月の間に機能を美の世界にまで到達させた。日本には四季があるが、日本の家は元来、高温多湿でじめじめした夏に備えるべく考えられており(地域に依っても違うが大半は)、木造の軸組が発達し水平と垂直の構成で一切無駄のない力強い構造美を作っている。屋根を架ければ内部空間ができ、建具も目的に合わせて取り外しを可能とし、空気の流れる空間(開放空間)を作り出している。また、大きい屋根によって建物と深い庇を持つことにより、風雨や日射から守られている。雨が降れば軒先、雨溜溝などによって雨の情感を出し、雨だけでなく自然に逆らわず、風、太陽、緑、水を大

事に生活の中に取り入れ、空間構成、素材、簡素な道具でその季節に即した生活の作法で厳しい季節を豊かに暮らしてきた。

そんな日本人の心の素晴らしさも現代人の意識構造及び美意識の変化に伴い、形のみ伝承されているのが残念である。便利で新しいものは重宝がられ、古くて不便なものは捨てられていく時代に、長い歴史の中に風雪に耐え、人々の心の中に物語を作り、現存している民家も、保存するか、消滅させるか、蘇生させるか、全国の新指定以外の民家は重大な選択を迫られている。そして意識のない人々によって消滅させられた民家も少なくないだろう。古い民家は全て残すべきとは考えない。

過去と現代の調和

この大阪府城東区に残る江戸末期の民家の改造を担った平井憲一は、主屋の土間部分上部に黒く光るもの「新しき造る」の選択がポイントだったと語っている。過去と現代との空間を隔てての調和、古い民家が姿を消していくなかで、今後の一つの指針となるだろう。

江戸末期の民家の改造で思う

平井 憲一 (建築家)

日本の伝統的な住まいづくりをみると、そこには自然条件を巧みに生かした手法が多く取り入れられている。間取りの工夫による風通しの効果や庇(ひさし)による日照の調整など建物自体のデザインだけでなく、落葉樹と常緑樹を上手に配置することによって間接的に日照を考慮するなど、自然の中で、夏を快適に過ごせるようになっている。一方、現代の住まいの多くは、暑さ、寒さ、湿気などのすべてを家のつくり、設備でカバーしようとする、いわばエネルギー主導型といえるが、石油ショックから省エネルギー化が大きく進められている。こんな中でより快適に、そして省エネルギーのため、自然の「涼しさ」を積極的に取り入れる工夫をもつ一度考えてはどうだろうか。家の中を整理整頓して風の通り道をよくするだけでも大きな効果がある。また、夏の風物詩、打ち水やスタレ、そして風鈴などは日本人の「涼」の感性にうつる。ほんの少しの工夫でだいぶ違うものだ。

土間を改造したリビングルーム。太い梁(はり)や木の戸が昔のままの雰囲気を与える
(大阪府城東区)
設計/平井 憲一
+アトリエ・サム
撮影/村松芳治

